

第11回建築コンクール

# 感じる建築

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部主催

# CONTENT



## シンポジウム

パネラー／審査員	04
はじめに	05
田中元子 [建築コミュニケーター]	06
yoshi47 [ストリートアーティスト]	12
前田圭介 [建築家]	16
シンポジウムまとめ	20

## コンクール

最優秀賞	23
優秀賞／審査員賞	24
佳作	26
あとがき／後援／協賛企業	27

## 第11回 建築コンクール シンポジウム

2020年2月1日(土) 名古屋国際センタービル 5F

### 審査員



#### 前田圭介 建築家

UID 一級建築士事務所 主宰 故郷「広島県福山市」を拠点に国内外で活動。内部と外部の自然をインタラクティブに取り込む建築は国内外で評価され、ARCASIA 建築賞ゴールドメダル (ASIA) をはじめ様々な賞を受賞。現在は、設計活動と共に広島工業大学教授を務める。



#### 田中元子 建築コミュニケーター

株式会社グランドレベル 代表取締役 喫茶ランドリー オーナー 建築関係のメディアづくりに従事後、株式会社グランドレベルを設立。2018年に洗濯機やミシン、アイロンなどを備えた「喫茶ランドリー」をオープン。多様な市民が集い、さまざまな活動に使われている。



#### yoshi47 ストリートアーティスト

ストリートアートに軸足を置きつつ、世界中でライブペイントや展覧会などのアート活動を行っている。ブレイキング、グラフィティ、メッセンジャーなど様々な経歴を持つ。建物に描くウォールアートやライブペイントを通して街と対話しようとする姿勢に独自の視点を感じる。



### はじめに

#### 前田圭介さん

こんにちは、前田といいます。このコンクールは昨年まで古谷さんはじめ、多くの建築家の方々が審査されており、テーマが抽象的でいろんな捉え方ができるコンクールだと思います。そのなかで今回は「感じる建築」と題して、いろいろな分野の個性的な方々と予定調和のない審査をしながら一緒に楽しみたいと思っています。よろしくお願いします。

#### 田中元子さん

はじめまして田中といいます。今回の「感じる建築」というテーマのもとで審査員として参加できることをうれしく思っています。建築という分野の中で、「感じる」というと、主観かもしれないとか、私だけかもしれないとか、そういうことがすごく置き去りにされがちなところだと思っているので、今日はその大事な部分にグッとフォーカスしてみなさんとの時間を楽しみたいと思っています。よろしくお願いします。

#### yoshi47さん

こんにちは yoshi47(ヨシフォーティーセブン) といいます。以前、建築士会の講演会でちょっとトークしてもらったという話があって、その席で審査員をお願いしますって言われて、はじめは「冗談だろう？」と思ったんですけど。。。まさかボクがここに立つとは思わなかったんですけど、ボクも建築という家が好きで、最近、伊良湖に家を買ったこともあって、今日はいろんなインスピレーションを逆にもらいつつ、見ていきたいなと思っています。

#### 浅井裕雄支部長

建築コンクールは今回で第11回目になるんですけども、何故こんなことを始めたかと言いますと、建築の定義を広げようということで、昨年まで10回繰り返してきました。前田圭介さんがおっしゃったとおり、抽象的なテーマを毎度毎度掲げているものですから、作品応募する側が戸惑ってしまう。そんなことがあって、シンポジウムをやるということになって、確か第4回目ぐらいからシンポジウムと一緒にやるようになったんです。最初はシンポジウムを一ヶ月ぐらい前にやってたんですが、なかなか運営するのが大変というもあって、今では、まず最初に審査員の先生方が「感じる建築」という抽象的なテーマに対して、どんな答えを持っているのかいうのを、発表していただき、それから全国から集まった作品を講評していくという手順になっています。それで、田中さんがおっしゃったとおり、抽象的な説明っていうのが、建築をやっていると、説明責任に追われて客観的にずっと説明しているので、今日はその抽象的な評価も、yoshiさんなんかは特にピュアに評価していただいて、三人のバトルが見れたら楽しいなと思ってますので、ぜひよろしくお願ひしたいと思っています。





的なフィリングではなく、「うわっ、気持ち悪っ」とかいう脊髄反射的なものも「感じる」というワードの中に含まれていると思っています。本当はこの建物はすごく抽象的じゃないですか。何を表わしているのかわからない、けれど気味の悪さだけはわざわざ感じてくると。そんな説得力にあふれていて、これを共感することが難しいかもしれない、自分の狙った通りには読んでもらえないかもしれないということを実現させていった菊竹さんの造形力とか、建築家としての軸というものに対しても感嘆するところがあります。

これが私の中では一番建築体験として豊かな建築だと思っています。世界で一番豊かな建築体験ができる建築だと思っています。デンマークにある「ルイジアナ美術館」という建物なのですが、この写真持ってくるのは本当は嫌だったんです。「ルイジアナ美術館です」って外観見せたかったんですけど、ルイジアナ美術館にはほとんど外観はないも同然です。普通の建物がちょっと見えるだけ。あとは地下だったり坂だったり、いろんなところに建



●ヨルゲン・ボー&ヴィルヘルム・ヴォラート「ルイジアナ美術館」

築がへばりつくように設計されています。そんな中で、そういう地形だからこそ感じられる建築体験と、作品や人々の振る舞いですとか、いろんな建築物だけではないものが相まって建築体験となっているという素晴らしい建築があります。

一度行ってください。アルベルト・ジャコメッティさんの作品がたくさん置いてあるところなんですけど、何が良くて、自由なんです。美術館って作品が「作品様」になっているじゃないですか。ホワイトキューブの中にちょっと置かれるみたいな。その「作品様」の置かれている建築物って感じにくいんですか？ただのホワイトキューブの中で作品が1個あって、「はい、作品に集中してください。何か感じてください」ちょっと圧強いですよね。ルイジアナ美術館は、窓からさんさんと、こんなキラキラした光の入る食堂があって、行ったり来たりもできるし、作品がその中に混在しているような状態が見られます。もちろん「手に触れてはいけません」ということも、触れてはいけないものは触れられないように置かれているし、出来るだけ「あれやっちゃダメ、これやっちゃダメ」ということも言っていない建築です。美術館という枠を超えて、様々な人の振る舞いを許して抱擁しているという意味でも大人の建築だと思っています。

もうひとついきますか。

これは手前味噌ですが私の喫茶店であり、「喫茶ランドリー」という建物で、これはほとんど毎日いる建物なので、だんだん建築体験としてはディープになっていきますよね。見ただけで行ったこともない建築から、よく見ている、1回くらいは泊ったことがある、そして建築体験が豊かだと衝撃を受けた建物で、こちらは建築体験として豊かかどうかはわかりませんが、私にとってはそうでありたいと思っている建物です。建築というと建物のことを指すことが多いんですけど、「ルイジアナ美術館」も、ほぼほぼ外観がなかったりして、ここもあるビルの1階部分を使った、たった100㎡の空間になります。「感じる建築」というテーマにおいてどんなことを考えていたかという、さっき作品を見てきたんですけど、自分が作って置いて「ほら、お前、感じてるだろ」というのは図々しいと思うんですよ。面白い冗談言ってる本人が、「俺って面白い奴だ」と思っていたりするのと同じで、傲慢だと思っています。なので、私は感じてほしいと思いつつも、それが叶っているかということあまり研究することはないんですが、一つだけ私は「感じる」というテ



●グランドレベル「喫茶ランドリー」

マに通ずるものとして、ここで人々が空間を誤読することをすごく意識しています。「読み間違えちゃった」いろんな読み間違えをしてほしかったんです。「これ何に見えるですか？」と言ったときに、「パーティールームに見える?」、「喫茶店に見える?でも洗濯機あるじゃない」、「ここでワークショップやったら面白そう」、「勉強会の会場に使えるかしら」。いろんな読み間違えをしてほしかったんです。なので、「こんなふうを感じたら正解」、「こう感じさせたい」、そういうものから解放された建築を作りたいというのが私の考え方でした。その誤読のもとにおいて、しかも「その誤読のとおりに使ってもいいよ」という場所に仕かけたので、扉のところにガーランドが飾ってあったり、植物が掛かってたりするんですけど、あの辺とかは全然私の意図じゃないんです。「誰がどうしてやったのかな?」と、いつの間にかこうなっていて。そのくらい自由に誤読してほしいと思った建築なんです。でも、どうでしょう。誤読できる建築とそうでない建築があって、真っ白なキャンパスに何もなかったら、それ、読むものもないですよ。なんですけど、ぐちゃぐちゃ置いてあったり、「何の用途かな?」と思わせたりするには、ある程度誤読のきっかけになる補助線のようなものが必要で、私はそれが主線にならないように「こう感じなさいよ」という線ではなく、「何に見える?」、「あなたはどんな色塗るの?」、「続きの線書いちゃう?」。そんな人が誤読をしよう、「うっかり」してしまうという状況を目

指してここをつくりました。

さっきの「ルイジアナ美術館」で話しましたとおり、いろんな人の振る舞いを許したいと思って、ここをつくっています。「ターゲットは誰ですか?」と、こういった飲食店やるとよく聞かれるんですけど、私の場合は「あまねくすべての人々ですよ」と言っています。みんなに両手を広げて「おいで」と言いたい。どんな人にも言いたい。ということは、100人を受け入れるだけではなく、「たった1人のあなたが100通りの感情、泣いている時も笑っている時もいいですよ。同じ意味で」と言っています。そうした自由であって多様であることを、自分自身が自分の自由さ多様さを許容できるか、あるいは他者が自由で多様にやっていることを許せるのかということに挑戦したかった。その自由さ多様さを許容できるかということは、いい人じゃないとできないような感じがするじゃないですか。なんかレベル高いなみたいな。なんですけど、ギスギス意地悪な人が、ふわふわで良い匂いがしてうっとりするような空間でもギスギスしていられるかって言ったら、ちょっとふんわりしちゃうじゃないですか。逆にとても優しい笑顔のある人に、独房のようなところに閉じ込めて、「さあ、いつもの笑顔を見せてください」。そういうのも酷ですよ。私は自由で多様なことを許容できるかどうかということは、実は建築でどういかなることではないかと思ったんです。物理的な環境で人の性格そのものがほとんど左右されてるんじゃないかなということが、ここをつくる興味のひとつだったんです。そんな訳で、人々が自由にやっている、私自身も自由、多様にいる。私もいろんな時がある。私は誰かを許しているし、私も誰かに許されているし、私も自分自身を許しているという状況になりやすい。絶対にここにきたらなるとは言いませんよ。けれども、うっかりそうなっちゃう場所を作れないかな。それも、ふわふわの綿を敷き詰めるのではなく、常識的な建築の範囲でそれを実践できないかな。身近なものレイアウトや光の加減や、それを受け入れるサービスや人々のコミュニケーションとか、まさにソフトウェアとハードウェアとコミュニケーション、オルグウェアと呼んでますけど、その3つの柱でもって人々がうっかりそのような人の良いところを出しやすいような

環境を物理的につくるという挑戦でありました。これもそのように感じて、「うっかりそうなっちゃいました」、「なぜか居心地がよかったです」、「なぜか子ども達が遊んでいる姿を愛おしく感じました」とか。「何でだろう」というところに私の狙いがあります。「素敵な空間ですね」、「おしゃれな空間ですね」と最初はよく言われたんです。物もそんなに置かれてなかったし。その頃はすごく悔しかったです。「おしゃれなものをつくろうと思ってないし」と思っていました。だんだん人々が、「ここって、いろんなこと許してくれる場所なんだ」、「ここは自由に使っちゃっていいところなのね」と思って、旗付けちゃったり植物付けちゃったり。

人の手垢が具体的に残っていくことで、それを見た人がまたここを許される場所だと感じてくれるという、いい喜びのループができる、いい秩序のループもできていく。「自由にさせたら大変なことになりませんか」とよく言われますけど、意外と起きていなかったりします。

早いんですけど、私の5枚のスライドの紹介は終わりです。聞いてくださってありがとうございました。

**浅井** ありがとうございます。この5枚のスライドを審査員の方々見ていただいてどう感じたか、田中さんにご質問でもいいですし、感想を聞かせてください。

**yoshi47** ホテルはどこにありますか。

**田中** 鳥取です。

**浅井** 米子の海岸沿いにあります。

**田中** 空中に浮いている部分は、今はパーベキュー場として使われていたり。かと思えば、下のラウンジのところは当時の流行りと言いますか、重厚なインテリアが色濃く残っておりまして、残され方とかしつらえは大切に使われています。ぜひお勧めの宿泊施設です。

**浅井** 奇妙さをもう少し補足すると、竣工当時、周りは2階建ての旅館しかなかったんですね。

**田中** その写真持ってきたかったんですね。私も迷いました。平屋の木造の民家みたいな所に、これが「ゴン」と挿入されているというか、宇宙船が不時着したかのような不気味さと要塞のような重厚さがあります。

**浅井** 1階のお風呂がいいですね。

**田中** お風呂も最高ですね。純和風とか一つの記号的なスタイルに集束されないので、「何だこは？」的感があるので、なかなか人に伝えられないが故にもう少し評価されてもいいんじゃないかと。おしゃれとか言えないし。「えっ、おしゃれって聞いたけど、これ何？」になっちゃうんで。でもめちゃめちゃいいです。中もすごくインパクト

があります。

**浅井** yoshi47さん、質問の意図は何だったでしょうか。

**yoshi47** 普通に行きたかったんです。

**浅井** yoshiさん、「感じる」を議論してください。

**yoshi47** 感じました。行きたいと感じました。

**田中** そう言ってもらえるのは嬉しくて、「何かを感じさせなきゃいけないと思っているんじゃないかな」と思ったプレゼンシートも何点かあったんですよ。そんな中で、これって何かを感じさせようという使命からも逸脱しているようなところがあるので、だからこちらが勝手により深く感じてしまうということがあるという、要するに感じさせるという指揮棒を取るっていうのは結構難しい。取りすぎるとあざとくなるし、まったく取らないと何でもなくなっちゃうので、「感じる」というものは深いものがあります。

**前田** 一番最初の、カンボ・バエザさんの空間から田中さんの建築への興味が始まって、「喫茶ランドリー」に至るまでの見た目の空間の変化がまるっきり違いますよね。どういうふうに感じながら変わっていったんですか。

**田中** ありがとうございます。すごくいいツッコミで、1枚目のカンボ・バエザさんというのは本当に正直なプロセスなんですけど、これを見て「ミニマルが好きになると思ったらたら大間違いだぞ」という話なんですよ。建築というものがいかに人のために、人の喜びとか希望のためにつくられているか、それをどうやって設計できるのかって考えると、必ずしもミニマルというスタイルがそうさせている訳ではないと。人って何だろうとか、どんなことをどんなふうを感じるんだろうということを探求していくと、入口はミニマルでしたけど、どんどんミニマルを、逸脱していくというプロセスなんです。最終的には「喫茶ランドリー」みたいに、「お前ら自由に使え」という場所になっちゃったという感じです。

**前田** 「喫茶ランドリー」は誤読して、自分の予定調和じゃない使い方を期待しているわけじゃないですか。「これはないだろう」という使い方はありましたか。

**田中** これ、何風でもないじゃないですか。西海岸風でもなければ、インダストリアルでもなければ、ミニマルでもない。でも、「なんかおしゃれかも」と言ってくれる



中で、二次元 YouTuber っていう、アニメキャラクターみたいな子にオタクのファンの人が会いに来て、実際にそのキャラと会ってしゃべって楽しむイベントがあった。私はその機会を聞いて「何だろう。」と思ってたんですけど、「何でうちでやりたいんですか。それ、うちに合うと思ってるんですか」みたいな。すごい抵抗したんです。その時、自分のオタクに対するすごい偏見ぶりを知って、後から自分で本当に痛いと思いました。でも、「ここでやりたいんです。ここが好きなんです」とおっしゃってくださって、実際ここでやって素晴らしかったんです。オタクだろうと、子連れのママだろうと、障害によって苦しんでいようと、誰かに会えた、自分のしたいことが実現できたという喜びの根っていうのは全員変わらないんです。だからその時の偏見を突破するくらい、「ここでやりたい」と言っていたことで本当に学びました。なので、「ここイメージずれていること起きませんか。やられませんか」というのは、しょっちゅうなんです。そのしょっちゅうの中に共通性があって、それは良かったとみんな思ってくれていて、その良かったと思っている姿っていうのが、アニメだろうが山だろうが関係ないって感じです。



## パネラー 02 yoshi47 ストリートアーティスト

12月の初めくらいかな、その時に山梨県の市川三郷町と  
いって神明の花火（日本三大花火）がすごく有名なところ  
です。そこにある家なんですけど、外観も結構わか



● Kuu House

ない感じで、外も映しつつ中も映しつつという写真を  
ちょっと拝借しました。何故ここを今日紹介しようと思っ  
たかという、アメリカのポートランドと政府がアートレジ  
デンシーとって、海外のアメリカ人のアーティストたちを  
日本へ連れて来て日本のアートシーンとライフスタイルを見  
せて、プラスこの近くにある小学校で、10人しかいな  
い過疎地の学校でアートを教えて帰ってくるというプロ  
グラムを作ったんです。なぜか僕がピックアップされて、と  
いうのも、ポートランドで壁画を描いていて、そのキュ  
レーターの人と仲良くて、プラス僕英語ができたりするの  
で、翻訳とか通訳を通じ、プラス自分もアーティスト  
としているんな街をアメリカ人に紹介していくと。でも、  
こういった所来たことないので、あまり何も喋ることは出  
来なかったんですけど、Kuu Houseっていつて築150  
年超の古民家を（古民家ブームとか言われてるんですけど。  
ブームとかどうでも良いんですけど）ここを買い取ったあ  
る家族が3人いるんですけど、そこのお婆ちゃん76歳で、  
お婆ちゃんの世代のちょっとお姉ちゃんがここに昔、都会  
から戦争で疎開しに来ていて見つけた家で、隣に茅葺き  
屋根の家があったりとか、畑があったりとか離れがあって、  
読書室みたいな所があったりとかして、ちょっと外に出

ると山しか見えない所の山の天辺の所にあるんですけど、  
そんな所の古民家で2晩過ごさせてもらいました。囲炉  
裏があって上の方は昔蚕を作っていた倉庫みたいな所が  
あって、プラス、オーナーさんはアンティークが大好き  
で、取り敢えずなんで僕が紹介しているかっていうと、す  
げ一人間の気持ちがずーっと入っちゃって  
る一つの個性的な家になっちゃってると  
いうことを僕はよく古民家に行くと感じる  
んです。全く手を入れていなくてもずっと  
20年30年ほったらかしの所へ行くと昔  
の人の気持ちがちょっと伝わってくる。皆  
さんもたぶん同じだと思うんですけど。逆  
にこれでまた手入れしてその人の思いを色  
んなところで飾り付けだったりとか、和紙  
が有名なんですけど、漆喰のところを和  
紙をぐわーって貼って、和紙の壁が出来  
てたりとか、そういうのを見ると、その人

という家が好きになってくるんですよ。これすごい良  
いっすねっていう、そんな軽い話では無くなって来て、床  
とかマジで匂い嗅ぎたいとか。床、これ何で作っている  
んですかっていう話とかになったりして、昔はごま油と赤  
唐辛子を挽いてそれを塗って殺菌をして、ただ赤唐辛子  
がすごく辛いから作っている時はすごく目が痛いから大変  
だよって話を聞いたりとか。その歴史がすごく僕には「感  
じる建築」って感じるんです。素直にただ。何も知らな  
いんですけどね、作り方とかも。釘使っていないですよって言  
われても、ああそうなんだっていうことしか出来ないん  
ですけど。後は、今じゃもう全然見ない、外の戸が木で  
できている隙間風ビュービューみたいな。で、断熱材も使っ  
ていないのでリノベーションした時にそのお婆ちゃんが  
言っていたのが、昔は冷たかったと。僕も昔、生まれた  
時に住んでた家はすごく冷たかったんですよフロアが。今  
じゃ暖かい所ばかりですけど。それって冬になると、冬  
が来るなっているのをどんどん床で感じるっていうん  
ですよ。それを僕は、たしかに冬になって寒い冷たい、お  
風呂から出て来て冷たい冷たい冷たいって言って走って  
自分を思い出したりとかすると人間ってすごく良いなって。  
建築から感じる人間を逆にフィルターを通して感じるん

すよ。なので僕はここを紹介したいなと思って。又吉さん  
がやっているヘウレーカっていうテレビ番組でも最近ここ  
を紹介されていて。オーナーさんすごい喜びで、言  
いたくて言いたくて、言っちゃいけないんだけどって言って  
僕には教えてくれたんですけど。そんな感じの面白い所  
です。農泊って農業も体験できちゃうんで。すごい  
すよ、このくらい長い人参、山梨の三郷町では有名な  
んですけど、それをくれたりとかします。いちいちビニ  
ールに包んでくれて、見えるように。これで持ち帰って、プ  
ロモーションをしてくれみたいな。新幹線の中で何それ？  
みたいな風に。ゴボウ？いや人参ですって。そんな感じの  
面白い人たちがやっているのだからここをちょっと紹介したい  
なと思っていました。



● STORE IN FACTORY 旧店舗

ここはもう皆さんも多分わかると思うんですけど、昔の  
STORE IN FACTORYというお店です。STORE IN  
FACTORY知っている方いらっしゃいますか？昔の倉庫、  
中川運河の方の所だったと思うんですけど。まず、オーナー  
の原さんに壁画を（次に見せるんですけど）描いてくれ  
て言われた時にここでミーティングしたんですけど、初め  
僕入ったんです。昔から気になってはいたんですが入  
ったことがなくて。僕アンティークも好きで、古いものが好  
きで、ひとつひとつに命を感じるっていうか人が携わって

来た歴史をすごく感じてしまうので大好きなんです。こ  
こに入ったときの土壁だったりとか倉庫の昔の作り方って  
いうのがあまりにもボロボロすぎてそのボロボロがまた良  
くなっていう気持ちがあったりして、プラスこういったアン  
ティークがいっぱい置いてあったりとか。自前のあいつ  
た倉庫とかを作っていたりとかする原さんたちの趣味が半  
端なくて。今の建築の行き方とは多分逆行しているのか、  
よく分かんないですけど、こういった、なんか地震が来て  
崩れても良いんじゃないかっていう、そのひとときを楽し  
めば良いんじゃないかっていう考え方は僕にとってはなん  
か、人生ちょびっとしかないし、一秒でもこういうのが見  
られて感じられたことがすごく大切なことで、今回これを  
紹介したいなと思ったんです。

次これが新しいSTORE IN FACTORY  
で丸田町の方にあるんです（事項写真）。  
最初からもうここへ買って決めた時  
から原さんに連れて来てもらってまだ全然  
何も無いところで、ただの汚いビルみた  
いな感じでした。そこに僕の壁画がある  
んですけど、ここがすごいのは最初見た  
時にここ大丈夫っすかね？！みたいな話  
にも原さんも思っていて、なんとなく見  
えてるんで大丈夫だとは思いますが、ま  
だ全然不安なんでわかりませんって。そ  
ういうところから原さんといろいろ話し  
合って、何をするかみたいなことを話し  
合って進んでいったんですけど。結局、  
さっきもあっちの方のパネルを見ていた

時に、コミュニティーを大切にすることに  
かを書いてらっしゃる人たちがいたん  
ですよ。それって確かに建築って人が  
集まる所で、ただそれを楽しむって  
ことでもあると思うんですけど、こう  
いった場所って人を集めるためにど  
うしたら良いか、やっぱ魅力を出さ  
なきゃいけないかってとか空間って  
居心地がいいって思わせないとけな  
かったりとか、いろんな複雑な多分  
状況があるんだと思うんですけど、  
なぜか完成してから人がどんどん  
どん来て、パーティーに呼ばれる度



● STORE IN FACTORY 新店舗

にちょっと行ってみたいすると新しい人と出会ったり(原さんの人柄もあるとおもんですけど)たとえ今日原さんいなくてちょっとアメリカへ行っちゃってるよって言われても、ここに2時間も3時間もいられちゃうみたい。最後にはもう酸欠になって帰ってくるみたい。そのくらいなんかこう濃いところがあって、外見は普通のそこら辺にある昭和の遺産みたいな物ですけど、それでもやっぱり建築基準法満たしていれば、すげー面白いものができるんじゃないかなっていう、外は関係なしに中身は大切ですよってことがちょっと言いたくて。

僕、サンフランシスコに住んでいたんですけど、これ一瞬でみた時に白って思わないですか。プラス光すつ



●メイソン・ピーター 自邸

ごい入ってきてるし、太陽でしか感じられないんですよ。ここは、メイソン・ピーターっていう建築家でもありアーティストでもありサーファーでもあり奥さんはアーティストであり、この前、東京でも個展とかやっていたんですけど。その人の自宅です。共通の知合いのアーティストたち(昔から友達なんですけど)に紹介されてサンフランシスコへ2017年に行った時にここも入って、取り敢えず平家で、ドアちょっとあるんですけど全部が全部仕切りが無いってうか、よくあるみんなが望むような西海岸の家みたいな感じなんです。匂

いもそうですけど、手作り感も。メイソン・ピーターさん一人で全部設計して、一人で全部作ったってうんですよ。誰も手伝いを入れずに。その手作り感というかこれからどうなっていくんだろうねここは、みたいな感じを話したりとかして。彼と話していた時に、別にこれはこの建物の事じゃないんですけど、「誰かが住んで、売って、また誰かが買って住み続けて。その経年劣化ではなくて、日が経つに連れて、年が経つに連れて育っていく建物っていうのが僕は愛おしくて毎回考えている」って言われたんですよ。その時に確かにそうだよって納得する。お酒飲みながら。そりゃ僕は建築家じゃないし建築のこと何にも知らないけど、例えば安く済ませて10年20年たったら汚い感じになっちゃうって、なんか

育てたというよりは、どんどんどんどん老いていってそのうち汚くなって潰れてしまうんじゃないかみたいな。それよりは、どんどんどんどん人が手を加えていって、綺麗になると言うよりは、なんかこう面白いよねあの家っていう風に言われるような家を作りたいっていうのを言われていました。その時に僕は初めて、自分が家を作る時はそんな家が欲しいなって。でもまあ、お金がなかったら何処かそういった箱があったらそこを買ってリノベーションして面白い家ができたらいなって



●家サンプル yoshi47

ことを考え始めました。きっかけとなる建築家でもありアーティストでもある人の家の紹介でした。

最近僕が作った作品なんですけど、建築にすごくハマってるって言うよりは建物とか、建物に使われてる素材とかってものを30後半になり始めてから結構気になるようになってきました。最近メキシコの方で壁画をやったりとかグループ展をやったりとか個展をやらせてもらったりした時に、メキシコへ行っている町を訪問した時になんてこの町ってすげー色を使ってるだろう。



色の基準とか多分ないんだ だろうな。ペンキ塗らまくってんな。でもそれがすげー可愛らしくて、街に調和してて、人に調和してて、明るいんですよ。メキシコの色を使い方っていうのは、自分が今まで使ってきた色の使い方と合うところがあって、一回ちょっとメキシコ風なモノを作りたいと。プラス、やっぱりメキシコの家はすごく可愛かったり、シンプルだったりとかして。もしこんな家っていうよりは例えば、このぐらいの高さの人がいたとしたら、こんなでっかい建物が街の中にドーンってあったりとか、田舎ですげー見晴らしのいい所だったら邪魔だと思うんですけど、汚いところに工場地帯みたいところにこういうのがあって、中入ったらまた何か面白いとかってうようなアートハウスみたいなのがあったら面白いってうのでサンプルを作ったんです。別にこれ作ってくださいってう人いないし、作る予定もないんですけど、もしなんか未来で yoshi 君この土地に何か適当に建てていいよって言われたら、お金もあって。こんなよくわかんないやつ作って、多分、非難めちゃうか受けるかもしれないですけど、近隣の人に気持ち悪いとかって言われるかもしれないですけど、そんなの関係なしに、死ぬ前に一度はなんかやってみたいなという思いでサンプルを作ったんです。これで終わりなんですけど、、フフフフ。

## パネラー 03 前田 圭介 建築家

これは今から20年ほど前の岐阜県の大和村というところの写真です。アレックス・カーの「犬と鬼」という本の表紙になっています。この写真を見て皆さんは何を感じますか？見慣れた田舎の風景だと思う人はよく写真を見てく



●犬馬難鬼魅易

ださい。民家の裏山には土砂崩れを防止するためにコンクリートで固められた巨大な人工物が自然の山と対峙しています。つまりこの写真は日本中どこにでもあるような土木の人工物で美しい自然が破壊されていることを示唆している皮肉めいた写真なのです。日本人の多くは都合のいいものだけを切取って見ることができる悪い意味で素晴らしい能力を持ち合わせていると考えられます。例えば電車に乗って車窓からの山々を見て醜い無数の鉄塔が建ち尽くしていても「美しい山の風景だね」と言ったりします。

写真左下に小さい字で「犬馬難鬼魅易」という中国の韓非子に出てくる言葉があります。どういう意味かと言うと、王様が宮中画家に対して「この世で描きやすいものと、描きにくいものは何か？」と問うたところ、その画家は「鬼などの怖いものや派手なものは描きやすく、犬や馬など身近なものほど描きにくい」と答えたものです。白洲正子もこの言葉を好み、たくさん派手な花は簡単に活けることができるけれど、素朴な一輪の花を活けるのは難しいなどの言葉を残しています。つまり、身近な事や物

ほど意識的に見ないと気づくことが出来ないし、小さな声も耳を澄まさないで聴こえてこないといった様々な事柄に対して当てはめられる言葉で考えさせられます。

この本の著者であるアレックス・カーは、徳島県の祖谷という平家の落人の深い山奥に籠庵（ちいおり）という500年くらい前の古民家を若い時に購入し宿として運営しています。以前宿泊したことがあるのですが、この宿の民家から見える風景が500年前と全く変わってないんですね。というのも、変わるものが周囲には何もありません。だから500年前の農家の人が見た風景に思いを馳せていくと朝霧や夜の満点の星空など同じ風景を見ていることに深く感動しました。このような一見不便な場所であるにも関わらず、この美しい付加価値を少しでも多くの人と共感できればこの地に古民家は残ることが出来るだろうと感じた体験であり、建築とは何世代にも渡り実際の体験を通して語り継がれるものでなければならぬと感じた瞬間でした。しかし昨今、日本において老朽化や耐震強度不足という名のスクラップ&ビルドが繰り返されているのが残念ですね。たかだか40年50年程で解体の危機にある名建築も多々あるし、名建築だけでなく無名の建築であっても人の記憶に深く関わった建築はできるだけ残してほしいと感じます。僕が幼少時から慣れ親しみ思い出深い福山市民図書館や市民会館はすでに姿を消し、市民体育館も秒読みの状態ですが何もできないジレンマを感じます。先程の yoshi47 さんの話にあったように行政の人に「どうして壊すの？」っていう話をして、やっぱり耐震性能を理由に補強する予算が高いから難しいと言いつつ



●庭玉軒 真珠庵内



言葉しか聞こえてこない。一定の時間を積み重ねた建築はなんとかして次の世代に残せないものかと。そういうものに限って決して派手さはないし、定期的なメンテもされていないことが多い、しかしそんな大切なモノを残すことができれば当然文化も残せないだろうって。今を生きる私たちが考えなければならないことを感じさせてくれる1枚です。

次のこれは京都の大徳寺にある真珠庵という一休和尚の名利です。その中に庭玉軒というお茶室があります。この茶室へは2017年に裏千家の月刊誌「淡交」にて「茶室を感じる」というテーマで1年間毎月、中村外二工務店の数寄屋棟梁の中村義明さんと名茶室と一緒に周り対談をさせて頂くまで拝見したひとつです。

私自身も2007年にはじめて茶室を設計させて頂いてから、施主でありお茶の先生である奥様に茶の湯の楽しみ方を教えて頂きながら日々お稽古しています。

そこで感じるのはカタとしての所作は当然のことながら、それ以上に人をもてなす振る舞いの美しさと亭主と客の互いに感じとり合う楽しみかたに真理があるように思います。

話を庭玉軒に戻して、この茶室へ向かう露地のスケッチを見てください。右の中潜りから左の茶室へ向かい入っていきます。中に入ってもまだ外部のような内露地空間が続くユニークな茶室です。訪れた際にとても印象深い出来事がありました。アプローチの飛石を渡り茶室まで辿りついた時に中村義明さんから「なにかお気づきになりましたか？」と問いかけられました。しかし私の感覚が悪く、2度歩くも石の種類の変化以外に何も感じる事ができませんでした。すると中村さんが「実はね、躰り口に近づくにつれて、角がとれて、上部が丸くなっている飛石が使われています。つまり客は躰り口を潜る前に足元が不安定になりますから、無意識のうちに全身で緊張感を感じるのです」と教えて頂きました。ただ歩きやすかつくっているだけでは人の心は動かせないと、とても心

に残る出来事でした。続いて中村さんから、今回私のように何か感じられなかったら、それもまたいいのですと。無理して覚えるのではなく、自身で感じられる時に気づきがあればよいと。気軽な言葉を掛けていただいたことで、より感じるということへの意識が高まりました。



●アフリカ ケニア マサイマラ国立保護区

3枚目はアフリカのケニアに行った際の写真です。マサイマラ保護区という国立公園があるんですけど、そこで1週間くらい過ごしました。とにかく動物がめちゃくちゃ生き生きとしています。厳しい自然界のなかで生きる動物たちの生命輝く姿と豊かなサバンナの大自然で過ごしている動物たちの目が見たくてずっと行きたかった場所です。自然界の動物の姿を見ると動物園の動物は魂を抜かれた動物なんじゃないか!?というくらいサバンナにいる動物たちは本当に生き生きしてるんです。1枚では伝えきれないと思い勝手に欲張って4枚で1組という規格にして持ってきました。(笑) これは全て自分で撮った写真です。まずは右下の写真の雌ライオンは隣に雄ライオンがいてじゃれ合っている間のひとコマ。なんて言うか怖い百獣の王ではなく、本当に優しい感じというか、気持ちよさそうな感じのひとときでした。少し離れたところにシマウマの集団がいて長閑に草を食べているんだけどリーダー的なシマウマは鋭い目で辺り一面を見張っている姿が厳しいサバンナを物語っているようで自然界に生きる動物

の本能を垣間見た瞬間でした。続いて右上の写真はスーの大移動のもので運よく見る事が出来ました。数十万頭が大移動しているその膨大な数と川を渡る際に天敵に出くわさないように隊列を組んで渡る姿に感動しました。左下の写真はマサイ族の村訪ねて住まいを拝見させてもらった時のものです。住まい自体がとても小さく茶室的な空間でした。素材も印象的で牛の糞とかを壁に練り付けてつくっており、内部は薄暗く微細な光に暗順応していくなかで空間が認識できる体験でした。また、動物たちの目も輝いていましたがマサイの子供たちもとても澄んだ目をしていました。現代の携帯電話やデジカメなどにとっても興味を示していた姿が印象的でした。最後に左上の写真はサバンナで見た満天の星空と天の川です。ここでは標高が高いこともあって地平線から360度星空に包まれている感覚がとても明るいんですね。

大都市というものは上空から見た場合、街の明かりの量が多いことが豊かさの象徴みたいに感じるけれど、一方で普段の生活の明かりによる光害によって星空を見ることが出来なくなっている現状を知り、豊かさとは何かを考えさせてもらったアフリカの1枚です。



●ジェットウイング・ライトハウス(ジェフリー・パワ)



●ヘリタンスカンドラマ(ジェフリー・パワ)

私の好きな建築家のひとりでもある、スリランカを代表する建築家ジェフリー・パワの写真が4枚目です。(事項写真) 以前から知り合いの建築家仲間によく前田さんはパワを観たほうが良いよって言われていました。内外の境

界を巧みに設計されている方で、共通するところが多くいつか行きたいと思っていた矢先にタイ王立建築家協会からレクチャーの依頼がありタイ経由でスリランカを一人旅で回った時の写真です。この左上と右の写真は、カンダラマというパワ設計の森の中にあるホテルです。ここで感じたのは森に対してです。“森の中のホテル”と聞くと心地がよく癒される自然みたいなイメージを訪れるまで抱えていました。実際行くと想像とは違い、特に夜はもう聞いたことのない動物の鳴き声とかで、なんか怖さを感じました。しかも部屋の扉を開けると、そこは外つまり森と直結です。よって猿が歩いていたり、動物の判別が利くものはまだいい方で、もう何の鳴き声か分かんないようなものが一晩中鳴いている。さらに恐怖に陥ったのが変な鳴き声が部屋の中からし始めていることに気づき始めたときに、これはもうやばいと思って眠れなくなった。(笑)

その鳴き声の主はどこにいるんだろうと思ったらヤモリと判明。すごい変わった鳴き声で、ホッとして睡眠をとりました。自然が残っている場所でキャンプも家族とよく行きますが怖いという感情を持ったことがなかったので新鮮な体験でした。

次に左下写真はホテル・カンダラマからずっと南へ下ってゴールという町にあるパワ設計のジェットウイング・ライトハウスです。インド洋に面しているホテルです。これまたすごくて、ホテルに入ったらインド洋の荒波がザッパッと目の前の岩壁を打付けるような場所にホテルが建っているんです。普段瀬戸内海のチャブチャブしたプールのような穏やかな海しか知らない私にとって圧倒的に海のエネルギーの違いを感じました。そして夜、再び自然の声を耳にする。インド洋の押寄せる波の音がゴーッと、絶え間なく地響きのように鳴り続け寝る時にこれまた怖さを感じた。パワは自然と建築が対峙する

ことで自然への畏敬の念と自然界のなかで人間が生かされていることを教えてくれたようでとても感動しました。次は最後ですね。まず右の写真は2016年にとらや東京ミッドタウン店での企画展示のものです。「雨を感じる」



●雨の名前(高橋順子)



●名所江戸百景大はしあたけの夕立(歌川広重)



●雨を感じる第37とらやミッドタウン企画展(UID)

というテーマで企画展として3ヶ月間行われた会場を手掛けさせて頂きました。詩人の高橋順子さんの詩と、雨に因んだとらや羊羹を雨を感じながら楽しむものです。そこで私たちは会場内に雨を降らせたいと考えました。場所は地下です雨空に近い照度を考えオリジナル照明をつくったり、雨を調べたりして進めていきました。例えば、雨の太さは?雨の大きさや長さは?そして雨粒の間隔は?など普段生活のなかで全く気にも留めない現象や物体に対して設計のアプローチをしていきました。リアルな調査と一方で浮世絵師である歌川広重の雨“大はしあたけの夕立”の絵から圧倒的に雨を感じるのはなぜか?絵の中の雨の角度などを調べていくことで徐々に人が感じるであろう雨の実態をつかんでいきました。



同時にそもそも雨とは?つまり日本人は昔から雨の状態に対して500もの異なった名前を付けていることを知りました。

左上の写真なんですけど、右上に狐の雨で狐雨って書いてあるんですけど、要するに晴れている時に突然騙されたようにパラッと雨が降るみたいな。狐っていうのは騙したりする、だから昔の字で狐雨ってあんな風に書くんだとかね。高橋順子さんが書かれている本を買って、夕立とか五月雨とか今でも残っている言葉がたくさん

あるんですけど、昔の人って自分の気持ちの感情で見える雨が違ふと。だからあれだけの名前が考えられる感性を持っていたんだと。この会場を手掛けていた頃は事務所でスタッフたちと梅雨時期になるとそれぞれが今日感じた雨の名前を言い合ったりして楽しんでいました。会場構成として最終的には0.85mmのコーティングされた艶のある細いワイヤーを1000本、数種類の角度を使い分けながら実現させました。会場を訪れる人によって春雨、慈雨など感じ方も様々で、あらためて日本人の感性の高さに感動しながら取り組んだプロジェクトでした。



## シンポジウムまとめ

**田中** 今の前田さんのスライドから話して行っていいですかね。大変面白いと思いました。感じ方、それから感じるポイントが違うというのが面白いと思いました。前田さんは自然の中とか自然の仕組みとか、自然での生き様とかに対しての刺激が強いなと思ったんですが、私は電線とか鉄塔とか、人がもっといい暮らしがしたいとか、良かれと思って頑張っちゃうことが綺麗だなと思ってしまうタイプの人なんです。これはちょっとひどいですが、これは恐れも同時にあるからいい風景には見えなかったりしますが、例えば今、東京の日本橋の上に高速道路がかかっているんです。この高速道路を頑張って地下化しようというプロジェクトが進んでいます。日本橋の上に高速道路がかかっているのは美しくないよねということです。ですが美しい日本橋の姿を知らない私にとっては高速道路がかかった、人がもっと伸びていこうとする軌跡というか、そこに高速道路があるという事に対する抵抗感があまりありませんでした。高速道路がガツツリかかって日本橋がやられちゃってるんですけど、美しいと言うか面白いことに、この高架の下日本橋のところだけちょっと素敵なレリーフがついて素敵な電気が入ってるんです。高架の下だけれども、せつかくなので良い体験をして欲しいとか心配りがあったりします。東京の風景は汚いという人がいるんです。ですが私はそんな時に、これも風景だし、もっと悪くしてやろうもっと汚くしてやろうと思って作った人は一人もいないんだよなと、よく言っていて、何か健気に感じてし

まうんです。不器用って健気で、自然と違って全然完成度が低いじゃないですか。自然って本当に完成度が高く、最高の機能美だし、最高に合理的になっていて、人間って自然の摂理とかけ離れば離れるほど、縄文人から現代人になればなるほど自然の摂理とかのバランスとかも分からなくなってくるから、近代の風景はどんどん不器用になってしまうとい

う感じです。私は多分人間に興味があって何か意地らしいなと思ってしまうところがあって、「感じる」ということに対してその状況を見た時に何を感じるかということに、こんなに幅があるということに対しては非常に面白いプレゼンテーションでした。ジェフリー・パワは私も好きで最高ですよ。何か怖さ、人間って強いとか自然って強いとか聞きたいなものから離れすぎると、感じるセンサーもだんだん低くなってくると思っていて、やはり闇を感じるの光を感じるのと同様に敏感ではないかと。だからアンテナは光だけとか影だけとか感じるのではなく、高さの問題だと思うんです。なので強さがどちらにも出てきたというのは凄く面白かったです。

**yoshi47** 前田さんがやっていたのは自然について感じることをそのまま建築で昇華していくという事だとすごく感じていました。私の母親が表千家の先生なんですけど、お茶室を持っていて、僕もちっちゃい頃から直されて、うるせえと思いつつ喧嘩してたんですけど、最近大人になってアメリカから帰ってきた時に日本の文化をマジで習ってみるよと言って、お手前から全部やらせてもらったんです。そこで感じることで、やっぱり質素なお茶室の場合だったり、どうしてこれが建てられているとかいう理由とかもその時はどうでもいいと言われたんですけど、やっているうちにだんだんわかってくるんです。今日は梅雨で雨が降っていて暑いですが、湿度がありますけれどもこの音を聞いて…などという話を、その空間が気持ちいいなどと思うことは、建築であったり日本の家屋というのがそういうことを感じさせるために作られているんだなとい

う事を思います。「日々是好日」という映画がありましたけれども雨の音の事を言っていたりとか、シーンごとに季節ごとに戸が変わっていたりして、夏は風が通りやすい物になっていたりとか、冬はそれをシャットアウトさせるような障子になっていたりするのを見ると、自然との対話ができる家っていうのは素敵だなと思っていました。

**田中** 本当にそうですね。そこが私たちの矛盾でもありますね。隙間風に季節を感じて落ち葉に秋を感じて。なのに「落ち葉なんて誰が掃除するの?」なんていう思いもあるわけです。建築の世界にいて思うのは、建築を好きな人種っていうのはそういった色々な物を感じるのが好きだったりする人たちなんですよ。その人たちと話していると、みんなこの風とか好きだよねと思っちゃうんですけど、日本人の大多数が隙間風を感じたくないんですよ。その感情がマスであり、人間の欲望としては自然なことであったりして、そこがすごく欲望と本能というのはズレがあるじゃないでしょうか。欲望はもっと便利になりたいシャットアウトしたい、でも本能としては、風や自然の息吹みたいなものを感じて自分達はそれに反応するというものを本来は持っていたと思います。だから普遍性というのは何なのかとか、人間のあるがままに生きているということが感じるというテーマの中でもいろいろ考えるところがあったんですよ。

茶室で言うとも一度だけ薄茶からはじまって濃茶まで経験したことがあるんですが、非常に官能的な世界だなと思って今でも興奮が忘れられないくらいです。一つ一つに対してとても感度を高きさせられるんです。私が特に感度

や感受性が高いわけではなく、お茶という作法とか茶室という建築がその人の感度を引き上げると言うことに驚かされたんです。「本能なんでものはなくなってしまったんですよ私たち」と思っている、ケニアなんかにはポンと放り込まれたら感度がピンピンになっちゃうんじゃないか?みたいなことが大いにあると思っていて、その感度がすごく複雑に絡んでいて単に自然に対しての感じ方じゃなくて都市とか都会に対しても人の健気さに対して深読みするようになってしまっていて「感じる」というテーマは現代だからこそ対象が複雑でこじれていてだからこそやりがいがあるテーマだなと思っています。

**浅井** 田中さんのスライドと発言を聞いているとかなり自分のデザインという言い方は良くないと思うんですが自分の建築空間に対しては、来た人が自由に考えて欲しいと言う建築家の存在が消えていってそこに何か新しく入って行く人が作り上げて行くという立ち位置だと思うんです。yoshiさんも割かし自分の好きなことやっているとありますが、受け止め方が似ていると思うんです。相手に対してアートというのは感じるように感じてもらえばいいよというのか。それに対して、ちょっと前田さんだけ雰囲気が違うのかなと思います。前田さんは全部共通しているのはとても素直な感じるということなんですけど、前田さんは何だろうなど。答えが見つからないんですけど、そのあたり、もし見つかれば話して頂きたいんですけども。前田さんは「感じる」という事に凄くフォーカスしていて提供している感じがしたんですけどもどうでしょうか。

**前田** 私のはある程度、人のふるまいを想定して作っているような気がします。だから田中さんの喫茶ランドリーなどは





「器」的な強度があって、どういう風に使うかというのと、楽しむというのは同じだと思うんですけど、もっと想定しているなりそれによって可変するようなことがあるのかと思います。

**田中** おっしゃる通りです。つまらない使いたくもない器じゃなくてこの器で何食べようと思ってくれるからこの器を作ったかっただけです。それはダサイ器では困ってしまうじゃないですか。ただあんまり小洒落た器では飾っておきたくなくて使えなかったりする。だからちょうどいい器のチューニングをしたかと思っています。でも私があげた前半の三つの作品とかは前田さんの言ったら変ですけども建築家然としてるじゃないですか。丹下さんの建築を見てシンプルとかおとなしい建築ですとか言う人いないじゃないですか。菊竹さんのとかましてやそうじゃないですか。だからある程度感じ方が傾向というか、こういうふうには感じられるとよねとか共通項があると思うんです。菊竹さんの東光園とか大好きなんです。ここには、人間の普遍性があるかと思っていて前田さんの建築もその何を感じさせるかかってことの本質って多分人の普遍性だかと思っていて自然に対するの畏怖だとか気持ち良さの興味とかということ地球の裏側まで回っても人間は同じなんじゃないでしょうか。そういう一人一人が宇宙人?と思うぐらい違うという普遍性と、一貫性のバランスだと思ふし、そのバランスに対してどうフォーカスしたかというのが「感じる」を与えるか感じるを掘り起こすかのチューニングの具合だかと思っています。だからたぶん不感建築にはしたくないよという思いは共通しているかと思っています。

**前田** 田中さんのスライドで、そういわれてみると面白いのは前半が圧倒的なモノづくり、The 建築というようなもので、ルイジアナ美術館とかご自身のものというのはコトづくりをしているのかなと。そういう両義的なものがやっぱり喫茶ラ

ンドリーで実現したりしているのかなと思います。

**田中** コミュニティとか人のつながりとか言う人達が、ろくな建築を作らないですね。ダサイ。それが嫌なんです。そういう仲良くして行った方がいいよねと言うある種考えてみれば当然かなという話をする人って、何かパターン化されていて私はそれに限界をすごく感じるんです。みんなと本当にここでいい体験ができるよねっていう場所は丹下建築ぐらいにシンボリックで強い建築であっても何の不思議でもないかと思っています。それをコミュニティジャンルの人は全く目指していないというのは非常に腹が立っています。私はこの喫茶ランドリーでデザインの質と人が自由に振る舞えるという、相反したものを共存させることに強い関心を持って行ってきました。シンボルと言われるような物っていうのは皆が同じ印象を持っている富士山とか東京タワーとか鉄塔とかじゃなくて、だんだん、どこにどんな人がどんな風に集まっているかとか、どんな行いができるかっていう人の所作みたいなものに対して、人は感じながら建築の機能として感じながら生きていくんじゃないかかと思っています。そういったいろんな意味でシンボルをつくりたいと思ってこの場所を作ったんです。よく喫茶ランドリーとかやると「あんなにモダニズム好きだったのにね」とか言われるんですけど、人間に対してアプローチすると、何かいい人なんだろうと思われたりする事ってあるじゃないですか。でも実際建築もそうなんですけど、エッジな作品とかパンチのある作品を作る人がめちゃくちゃいい人だったり、逆にくつろぎの空間とか言ってる人が何かちょっと嫌な人だったりとか、作品と人柄は違いますねっていうのがよくあって、パンチのある作品って悪意とか意地悪で作っているわけじゃなくて、そのパンチによって人が何か良い刺激を受けたりとか人間ってどんな作品を作る人でもよりよく生きようとか自由になろうとかなんらか歩もうとする気持ちでしか作品なり建築を作っていないはずなので。私はコミュニティデザインをする人間がダサイ空間しか作れないと思われることにはケリをつけたいかと思っています。

**浅井** そろそろこの辺で皆さん三者三様の感じるについて発表していただきましたのでこれでシンポジウムを締めたいかと思っています。

## 第11回 建築コンクール 受賞作品



### 最優秀賞 大地の家 西口 賢

「自然との合一」 普段の何気ない時から感じる。日常から感じる。より建築として成り立っている。感じに行くのではなく、普段の何気ない日常から感じる。“感じるきっかけの多さ”は他を寄せ付けない。

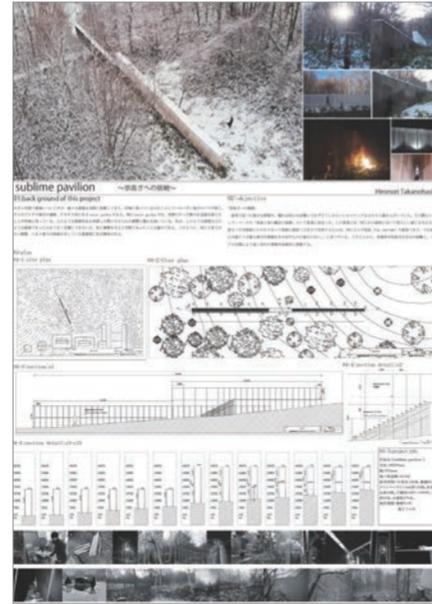
優秀賞



幸田町の住宅 北村 直也・金田 泰裕

想像力が感じられるきっかけがふくよかに感じられる。これから育ちそう。様々なスケール感で感じるを促す装置になっている。シンプルにミニマルな構成の中であるがそれぞれのスペースを手狭にすることで干渉しあひ空間の広がり暮らしの賑やかさが生まれている。

優秀賞



sublime pavilion 鷹背 大徳

「崇高さと美の観念の起源」エドモンド・バークの著書と自らの経験から崇高さを追い求めた建築制作。仮設的ではあるが崇高さを自分の経験によって実作まで昇華させている。恐れ、恐怖といった感情が自然と建築空間の構成によって感じられる。

優秀賞



あいだのエLEMENTとは... 伊東舜滋 / 東祥平

路地やブロック塀など、何でもない場所が新しく感じられる。小さな家は機能を外部化し街全体を家として置き換える。外部化することで街はあだにELEMENTを生み出す。こんなことが起きたら面白いという所まで考えられている作品。

前田賞



潜 森山 広崇

かつて修行場として栄えた長野県戸隠の森。特徴の異なる5つの場所に自然との関係性を増幅させるような装置となるフォーリーを設ける提案。

田中賞



with 馬場 健登

染色体XYをモチーフとしたかけがえのない心の記憶を感じさせるインスタレーション。海外の語学学校で様々な国の人が行きかうコンテキストが感じられる。

yoshi47 賞



問庵 安井 聡太郎

自分を大切にす=この土地を大切にす  
その土地でとれるものだけで庵をつくることで土地の歴史・風土・文化という土壌とつながる。自分で作る不器用さがさらに魅力となっている。



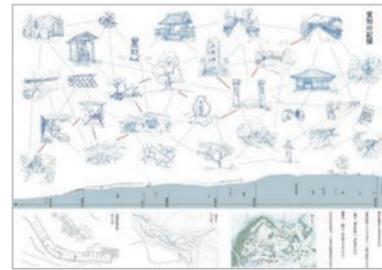
佳作



神上中学校の水平面  
「貸本+茶屋」

多田 正治  
近畿大学佐野こずえ研究室

木造校舎のノスタルジックな  
雰囲気を塗りつぶすことなく、  
既存教室の中にシンプルな長  
方形平面で凹凸の机、本棚、  
舞台などの要素を落とし込み  
「花見をする」小さいながらも  
豊かな空間が構成されている。



覚知の記憶 植田 美鈴 須賀友美

樹木や門など記憶に焼き付くような、継続的な時間の中  
で記憶として残る場所ごとの風景を記号的に抽出。その  
一部分となる建築の提案。



シロノシンクロニシテイ  
澤井大 長谷川 滉一郎

「感じる建築」というワードに  
フィットする計画。何でもない  
がらにどうに4つの四角い箱  
で構成された空間。表現を掻  
き立てられるような空間となっ  
ている。



だんだん荘

伊藤 一生

だんだんの敷地形状に時間を  
テーマとして近縁から遠縁ま  
で様々なリズムでアクティビ  
ティが構成されている。日常に  
はない経験も多く、世代を超  
えた多様な人々が集う場となっ  
ている。



生蔵

名城大学 生田京子研究室

これまでの歴史が積み重なる  
空気の深さを感じさせる。蔵  
の持つ重さを残しつつ新たな  
改修によりさらに深みを作り出  
している。



計画と雰囲気

アンビエントデザインズ  
石黒 泰司+和 祐里

規制や問題を達成する「計画」  
と、生活の場をつくる「雰囲気」  
を両立。さまざまな機能が求  
められるが故に殺風景になり  
がちな介護老人保健施設で、  
“感じる”が論理的に表現され  
ている。



くらしであそべ

リップレコーズ 加藤 賢志

田の字型 4DK マンションのリ  
ノベーション。作り手も暮らし  
手も感じて楽しんで生活する  
風景が直接的に伝わってくる  
作品。どの部分を切り取って  
みても自由に遊び心にあふれ  
ている。



あとながき

(公社)愛知建築士会名古屋北支部長 浅井 裕雄

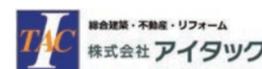
建築コンクールは、建築の定義を広げようと10年続けてきました。11回からは、私たちが議論したい「広げる」をより強く意識して、新たな審査員を迎えました。建築家はもとより、建築コミュニケーター、ストリートアーティストと活躍されている領域が建築を軸に広がっています。嬉しいことに、作品も例年以上にあつまり、応募された方々にも、この広がりを理解いただけたと思います。

今回のテーマ「感じる」は、身体的、精神的に多くの意味を持つ言葉です。シンポジウムでは、この主観的なワードをそれぞれ5つの事例から、情緒的で直感的な言葉で語っていただき、「感じる」が持っている多彩な意味と感情を知るとともに、審査委員のピュアな人間性が現れるシンポジウムでした。最優秀賞を始め受賞した作品は、作者の感情が表に出ています。建築に限らず、モノを作り出す上で、こんなピュアな始まりが必要と強く感じる事ができました。

後援

愛知県、名古屋市、(株)中日新聞社、(公社)愛知建築士会、(公社)日本建築士会連合会、  
(公社)愛知建築士事務所協会、(公社)日本建築家協会東海支部愛知地域会、(株)中部経済新聞社

協賛企業



株式会社確認サービス/株式会社CI東海/ユダ木工株式会社 /株式会社ワセ田ガス/  
株式会社カッシーナ・イクスシー/株式会社加藤設計

公益社団法人  
愛知建築士会 名古屋北支部

製作・発行  
公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部  
<https://www.asa758kita.jp/>  
<http://kenchiku-concours-758n.org/>  
第11回建築コンクール「感じる建築」2021年 1月発行

